

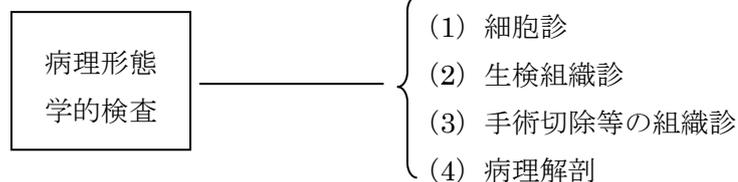
# 検査のパレット

今回は細胞診検査での検体取扱いについてお話をしたいと思います

## 《細胞診検査とは》

文字通り「細胞を見て」、「診断する」ことです。細胞は大きさが、1ミリの50分の1くらいで、とても小さく、透明です。それを調べるには、細胞を染色して顕微鏡で鏡検する必要があります。そういう技術を駆使して、患者さんから取り出された細胞を調べ、適切な診断を下すのが、細胞診です。

病院においては細胞診業務は、下に示すように形態学的検査の主体をなす病理形態学的検査の1つとして分類されています。



細胞診検査を行う上で最も大切なことは、良好な標本作製です。そのためには、新鮮な材料をできるだけ早く塗抹・固定しなければなりません。もし材料が長時間放置されていたり、目的に合った塗抹・固定が素早く行われなければ、細胞は変性・膨化し、正確な診断が妨げられてしまいます。

細胞診の成績は検体採取の良否とその処理の仕方に大きく左右されます。そこで検体採取から検査までの注意点とお願いをまとめてみたいと思います。

## 《女性性器について》

通常パパニコロウ染色を用いるため、湿固定を厳守せねばならず、塗抹したら直ちに固定液を摘下さることが必要です。特に診察室に暖房の入っているときには、乾燥させないように注意しなければなりません。綿棒を用いる場合には、あらかじめ少し生理的食塩水で湿らせておくと塗抹時の乾燥を防ぐことが出来ます。

## 《喀痰細胞診について》

検体はただちに処理し検査すべきですが、喀出から処理までに時間がかかる場合は、室温で12時間、冷蔵庫保存で24時間までが限度です。又、喀痰集細胞法があります。これは保存液が入っているので有効期限に注意して使用して下さい。

## 《胆汁・膵液について》

胆・膵領域の癌は、腹部臓器癌の中でも最も診断の難しいものとされてきましたが、近年におけるCTや画像診断法の進歩、そしてERCPやPTCなどにより病巣の確認がある程度可能となってきました。癌の判定を下すうえでの細胞診の役割は極めて重要であるといえます。

細胞診において重要な事は、いずれの検体もただちに氷冷中の容器に採取し、酵素作用を抑え、できる限り迅速に検体処理に移すことが大切です。

次回も引き続き、他の検体での細胞診取扱いについてお話ししたいと思います。